

## はじめに

西山雄二

(首都大学東京)

2015年11月18-20日、フランスのストラスブールにて国際会議「変異——ジャン＝リュック・ナンシーをめぐる（Mutations-autour de Jean-Luc Nancy）」が開催された<sup>1</sup>。ストラスブール大学と国際哲学コレージュの共催で、会場には連日100名ほどが詰め掛けて盛会だった。留学中している院生や日本から駆けつけた方を含めて、日本人の聴衆も少なくはなかった。国際会議の直前、11月13日にパリで衝撃的な同時テロ事件が起こったばかりで、犯人の捜索がまだ続けられていた。会議の中止という選択肢もあったが、ただ単純に会議をキャンセルすることはテロリストに屈することではないか、こんな時だからこそ堂々と共に思考しよう、という考えのもとで実施された（ただ、国外からの発表者4名はテロの影響で欠席したため、予定は大幅に変更された）。

フランスでジャン＝リュック・ナンシーをめぐる大規模な国際会議が実施されたのはこれで三回目である。2002年1月、ナンシーの著作をめぐる会議「あらゆる方向の意味」がパリで開催され、ジャック・デリダやアラン・バデュウ、カトリーヌ・マラブー、アレックス＝ガルシア・デュットマンなどの著名な哲学者らが討議を繰り広げた。その記録集は*Sens en tous sens: autour des travaux de Jean-Luc Nancy* (dir. Francis Guibal et Jean-Clet Martin, Galilée, 2004) として刊行され、デリダとナンシーのスリリングな対話は日本語に翻訳されている（「責任——来るべき意味について」西山雄二・柿並良佑訳、『水声通信』第10号）。

二回目は、2009年1月22-24日、国際哲学コレージュとパリ第4大学（ソルボン

<sup>1</sup> その記録集は*Cahiers philosophiques de Strasbourg*にて2017年に刊行予定。

ヌ)の主催で国際会議「外の形象——ジャン＝リュック・ナンシーをめぐって」がパリで開催された。主に中堅・若手研究者を中心にプログラムが生まれ、「政治とその他者」「世界の意味と創造」「複数の脱構築」という各日の総題のもとで、フランス、イタリア、イギリス、ドイツ、カナダ、ブルガリア、フィンランド、インド、日本<sup>2</sup>などから40名もの研究者が登壇した。その記録集は*Figures du dehors: autour de Jean-Luc Nancy* (dir. Gisèle Berkman et Danielle Cohen-Lévinas, Cecile Defaut, 2012)として刊行されている。

そして、三回目の会議は、ナンシーが長い間教鞭を執ってきたストラスブール大学で実施された。この節目にナンシー特集号を企画しようと、現場にいた若手研究者らと盛り上がったことが本特集号の発端である。その後、東京都立大学仏文学の出身である柿並良佑氏(山形大学講師)に協力を依頼して、掲載論考の選別や著者への掲載許可依頼などの準備を進めてきた。長年ナンシーの研究に携わってきた柿並氏の尽力がなければ、本号はこれほど豊かな内容にならなかつただろう。編集協力に際して、厚く御礼申し上げる次第である。

ジャン＝リュック・ナンシー(1940年生)は、デリダの脱構築思想を継承しつつ、共同性やキリスト教の問題をめぐって独自の思考を展開することで知られる哲学者である。ストラスブール大学で朋友ラクー＝ラバルトとともに長年教鞭を執っており(現在は同大学名誉教授)、これまで大小合わせて九十冊以上の著作を精力的に刊行している。共同体論三部作『無為の共同体』『共出現』『単数にして複数の存在』を初めとして、ヘーゲル論『思弁的注釈』『ヘーゲル』、カント論『定言命法』、ラカン論『文字の審級』といった思想家論、『イメージの奥底で』『肖像の眼差し』といった哲学的美術論、キリスト教の哲学的考察『神的な様々の場』『訪問』『我に触れるな』『脱閉域——キリスト教の脱構築』『アドラシオン』など、多領域に渡る彼の著作は世界中で翻訳され、日本語訳も二十冊以上を数える。本特集号では、彼の多彩な研究をめぐって、とくに哲学(共同体論、世界論など)、政治論、宗教論、芸術論に関する論考を選別した。

<sup>2</sup> 当初は欧米からの参加者のみで、日本人の発表者はいなかった。「日本では既に20冊ものナンシーの翻訳書があるのだから、日本からの発表も必要ではないか」と主催者と交渉した結果、私と馬場智一氏の参加が最終プログラムに編入された。

ナンシーの日本語での雑誌特集としては、『未来』第477号（2006年6月）、『水声通信』第10号（2006年8月）以来、特集は組まれていない。澤田直『ジャン＝リュック・ナンシー——分有のためのエチュード』（白水社、2013年）という優れた概説書が刊行され、ナンシー思想への見取り図を与えてくれている。ますます精力的に展開されるナンシーの思想を日本の読者が理解するための手引きとなればと願い、本特集号を編纂した次第である。ナンシーは1990年、五十歳のときに心筋梗塞の発作にみまわれ、翌年に心臓の臓器移植を受けた。他者の心臓と共に生きるみずからの実存のことを彼は小著『侵入者』で綴っている。そうした実存的経験を踏まえつつ、彼の旺然たる思索活動を讃えて、本特集号では「ジャン＝リュック・ナンシーの哲学の拍動」(Pulsations philosophiques chez Jean-Luc Nancy)と総題を付した。

翻訳テキストに関しては、ナンシー氏本人をはじめとして、数多くの著者に翻訳掲載の承諾を得ることができた。彼らの惜しみない協力に対して、心からの感謝を表明しておきたい。

慶應義塾大学の市川崇教授にも論考の執筆を依頼したところ、本特集号のために力作を届けてくれた。厚く御礼申し上げる次第である。

翻訳に関してはとりわけ若手研究者の方々に依頼したが、どの訳者も迅速かつ的確に翻訳原稿を作成してくれた。翻訳原稿には私と柿並氏が目を通して、適宜加筆修正を施した。毎年ルーティン化している大学の紀要の存在意義は往々にして曖昧だが、このように若手の初々しい貢献によって紀要が充実し、また、若手にとってのインセンティブになることは実に理想的である。みなさんの参加に心より感謝する次第である。